

燈畑子供神楽を奉納して

梅田 三郎

郷土史創刊号に掲載した、末江大祖神社に因む伝説、竜が夜な夜な水を浴びたと言はれている池も、数十年前の水害で堤防は切れて、荒れはてたま、になっていた。

十数年も前の事であったが、村祇園祭の折りに、故熊谷貫一宮司先生のお話で、当社は行橋市元永に鎮座する大祖大神社、京都郡誌によれば（延長八年再建）より古いお宮であるから、大事にする様に言われて、今まで考えていた考え方を改めて、此れに因んだ史跡を探究する事にした。

先ず事始めに、機会があったら池を修復して池に水をため、周辺を整備したいと思っていたが、昨年十月より機会を得て、池の修復工事に奉仕する事が出来て、十一月には水、満々とまでは言えないが水を溜める事が出来た。

た。

燈畑からは舞う子供達、囃子方、お母さん方、其他の関係者を含めて二十三人の方々が来て下さった。奉納については色々と考えて迷いに迷った。

滅多にないお神楽であるから近くの区に案内して子供達にも見てもらいたいと思っただが、ささやかな祝の品も用意していたので、其の点で区の方々だけにしたので、区外の方は、四、五人に留めた。

見事な衣装を着けて、いろいろのお神楽を約二時間に亘り舞っていただき、見物の皆様も久方振りの方、又は始めて見る方も見事なお神楽に満足した様でもあった。

私はこんな立派な衣装と大勢の人数の出演に対して、お礼が余り



お神楽奉納

末江でお神楽を奉納したのは、数十年前に鳥居の修復をしたおりに当時の区長の松尾角太郎さんにより奉納されて以来の事で、松尾さんの未亡人サクさんが、梅田さん、あなたが老人クラブの支部長の時に、是非一度お神楽を奉納して下さい、お金は私が出すから、との話が幾度かあったが、お神楽を奉納する事は容易な事でないで、仲々實現出来なかったが、池の復元工事を完了する機会に、燈畑の少年神楽を緒方区長さんにお願ひして奉納したいと思った。それは一市三町の芸能大会を参観してからの事であった。

燈畑の少年神楽を参観して

行橋市外三町の郷土芸能大会が京築神社関係者の主催で、行橋の市民会館で催されたが総代の奥一先生より案内状を頂いたので芸能大会を参観させて頂いた。犀川町からは燈畑の少年によるお神楽が演ぜられた。小学校六年生の白石さんの舞った盆神楽と五年生の原田調の舞った翁はじつに見事なもので、当日随一の出来で満場の人の拍手があった。舞ひ終つてからのインタビュで学校の余暇の稽古の苦勞が伺われた。よし、このお神楽を奉納しようと思ひきめて緒方区長さんに、十分なお礼もできないがと、相談したところ、他町村ではなしと、心よく承知して下さいだったので十二月十一日の日曜日に奉納して頂いた。

奉納当日の様子

十二月十一日は雨模様で雨が降れば場所をビーアンドジーに移すつもりであったが、幸にも、どうにか雨も降らずに終わって助かっ

に少なかったので相済まなかったと思う気持ちでいっぱいであった。

聞くところによれば福岡の博覧会の郷土芸能大会には犀川町から出演するとの事で、その日は博覧会見物も兼ねて応援に行きたいと思っている。

各町村とも芸能部門では後継者問題で悩んでいる折に燈畑の少年お神楽は育てる方・学校の余暇に練習する子供さん、並びに御両親の方々には大変なご苦勞があると思いますが犀川町のお神楽を次の世代まで残す為に頑張つて戴きたい。私も郷土史会の一会員として後援致したいと思っている。

最後に燈畑のお神楽講関係の方々、区の役員の方々にお礼を申し上げてこの稿を終わります。

短かくちづめる技もあり容易にその姿を人に見せない、いまだ人間が手づかみにしたことはないと言って手ぶり身ぶりで珍しいヘビ「ツチ」の話に幼な心に「ツチ」はヘビの神様ではないかと思つた。話はかわりますが、私の母は生前、柿が好物でした、秋になると、母の大好きな柿が彼方、此方から届いて柿のたえたことがありませんでした、少々シブイ柿もおいしそうにたべていました、又母の大嫌いなものが「ヘビ」でした、誰でもヘビは可愛らしいものではないませんが、母のヘビ嫌いは柿の好物と並んで有名でした、そのせいか私もヘビはが手で嫌いです。よく「赤ちゃんが生まれてヘソの緒を地に埋めて先ず最初にその上を通つた生物が一番こわい相手となる」などと子供の頃話してましたので、母も、私も、きつと「ヘビ」が最初に通つたのであろう、と、今日までなんとなくそう思い込んでいましたが、よくよく考えてみますと、私は旧正月の元日大雪の降つた早朝誕生しましたので、如何にヘビでも冬眠中は出るけなかつたでしょう

ヘビといふ動物は進化の過程から申しますと、私達哺乳動物よりはるかに先輩格にあたり、今から一位数千年前に古代爬虫類の中から特異な進化を遂げて、全世界に広がつたそうです、その故でしょうが私も人間がともすればヘビを嫌悪するのは爬虫類全盛期の原始哺乳類が、その圧迫に苦しんだ名残であると云ふ説もあります、現在は人間全盛期で、生物は人間優先の時代で、弱い生き物は住みにくい環境にあると思います、ヘビも昔にくらべ少くなりました二月四日の朝日新聞の天声人語に広島県の上野町では、この春か

あとがき

。「さいがわ」第七号をおとどけます。もすこし早く発行したいと思つて努力しましたが、年度末になつてしまいました。本年度は七月に町誌編集委員会が発足し、平成五年の尿川町の町制施行五十周年を目前に「尿川町誌」発刊にむけて町でとりくんであります。よりよい町誌ができますよう会員の御協力をお願いします。本号では郷土に伝わる行事 特に神幸についての原稿を中心に、数多くの原稿をいただきましたが、更に数多くの会員の皆様方がお気軽に投稿して下さいませう、編集部一同お待ちしております。本号に「豆多良区水害の歴史」を投稿して下さいました桃井正親氏は昭和四十三年夏に逝去されました。この原稿は生前に事務局に寄せられたものです。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。本会の活動や、本誌について御意見などございましたら事務局までお知らせ下さい。

編集部

ら「まほろしのツチノコ」を生け捕したら三百万円と賞金をつけて捜索活動を行うことになつたと云ふ記事が出ていましたが、世間で大き過ぎるほどの「まほろしのツチノコ」世にも珍しいヘビ息子達の見た「太い胴、短い体長のヘビ」は果し何であつたでしょう、人里近くに棲息して容易に姿を現わさず、不思議な気持と、今でも生きて居るのか？あれこれ考えるのですが、私の思わくとは関係なく彼のヘビは、どんな夢を見て冬眠していることでしょう



郷土誌 「さいがわ」

平成元年四月印刷

平成元年四月発行

編集・発行 尿川町郷土史研究会

尿川町本庄

尿川町教育委員会内

印刷 文信堂印刷所

(電話) 〇九三〇二一 ② 〇三三二五